

総務企画消防委員会行政視察報告書

会派名 新生・市民クラブ

氏 名 大 塚 正 俊

日 程	令和元年 10 月 9 日（水）午前 10 時～12 時 00 分
場 所	海士町役場
相 手 方	海士町人づくり特命担当課濱中課長
参加議員 氏 名	大塚正俊、松葉民雄、草野修一、荒木ひろ子、恒賀眞太郎、中西伸之、木ノ下素信、三重野玉江
目 的	島前高校魅力化プロジェクトについて
内 容	1. 海士町の概要 海士町（あまちょう）は、日本海に浮かぶ隠岐諸島の島前にあり島根県隠岐郡の行政面積 33.44 ㎢、総人口 2,280 人（2019 年 6 月 1 日）の町です。 少子高齢化による人口減少が進んでいましたが、2010 年以降はほぼ横ばい、2012 年以降は行政・町民の地域おこしの活動が実り人口が増加している。 2. 現地調査の概要 （1）高校魅力化プロジェクトについて 現在では、日本各地に広まっている『高校魅力化プロジェクト』は、隠岐島前が発祥の地。 生徒減が続く高校がなくなると、町はより一層衰退する。そのことに危機感を持った地域が、県立高校と協働することでプロジェクトを立ち上げ、それが 10 年の時を経て全国的な事例となっている。 （2）取り組みの経過 10 年前、島前地域では、この地域唯一である隠岐島前高校が、生徒数の減少により廃校の危機を迎えていた。 高校が廃校になると、高校生が地域からいなくなるだけでなく、働き盛りの親たちが家族ごと島を出る。 人口減少に歯止めがきかず、地域の少子高齢化は加速、伝統行事や一次産業は担い手不足で衰退し、地域の活気は失われ、やがて島に住む人がいなくなる。そんななりゆきの未来が予想された。 そんな暗い未来が見える中、島前 3 町村が協議し、活路を見出したのは生徒が行きたくなる、保護者が行かせたくなる、地域が活かしたくなる、そんな「魅力的な学校をつくる」ことであった。

様々な立場や意見の違いはありましたが、お互いの地域への想いや子どもたちへの想いを共有し、互いに折り合いながら、少しずつ連携を進めてきました。その結果うまれたのが「島前高校魅力化プロジェクト」である。

「島前高校魅力化プロジェクトとは」

これまで、学校・行政・地域住民が協働し、日本各地から意志ある入学者を募る「島留学」制度や、地域住民が島留學生の支援をする「島親」制度、山積する地域課題にチームで協働的に取り組む課題解決型の探究学習の構築、学校・地域連携型公立塾「隠岐國学習センター」の設立など様々な取組を進めてきた。

「隠岐國学習センターでの夢ゼミ」

現在では、離島・中山間地域では異例となる生徒数の倍増を実現し、日本全国、さらには海外からも生徒が集まる高校になりました。同時に、高校への地域内進学率も高まり、子どもたちの地域外流出が止まった。

また、生徒たちは学校だけでなく島全体で学び、地域に活気をもたらしています。海士町への影響を見てみると、観光や人口などにとどまらず、地域の祭りで神輿が復活するなど文化面にも波及していることがわかる。

「地域へのインパクト」

その結果、「いつかこの島に戻ってきたい」と言う生徒も現われはじめています。

学校や地域が魅力的になると、地域に子どもが留まり、若ものが流入する。そして未来の担い手が増えることで、地域の文化・産業が継続・発展する。最終的には、それが更なる魅力につながり、好循環を生み出すことになった。

（３）島留学制度とは

島外から島前高校に入る意欲・能力の高い生徒を対象に寮費・食費（月２万円）や里帰り交通費等の補助が出る制度である。国内でも特に治安の良い島の環境に加え、島前高校の寮は学校隣接のため安心安全。寮内では現役教員による学習指導や進路相談もあり、集団生活を通して主体性やリーダーシップ、自立心を育てている。

（４）地域連携型公立塾「隠岐國学習センター」

「隠岐國学習センター」では、一人ひとりの学力に合わせた自立学習を支援し、社会の課題と自分の興味・関心を紐付ける『夢ゼミ』を実施している。２年生の夢ゼミではテーマ別ゼミが複数あり、一人ひとり興味関心に応じて選ぶことができます。同じゼミのメンバーやスタッフとの対話の中から未来の自分を見つけていく。

	最近では ICT を活用した『遠隔夢ゼミ』で遠方や海外の高校生との交流も進めている。 ・ 塾の運営費（町負担分） 4,000 万円/年間 ・ 月謝；10,000 円/月（週 6 日、16：30～22：00） ・ スタッフ；10 名（講師 8 名） （5）島前高校のデータ（令和元年 5 月現在）学校の HP より「学校」 全校生徒数 157 人（H20 年 80 名）、男女比（男：女）41:59 留学生の人数 72 人（定員の 40%） 「寮」 寮の定員 92 名入寮者数 81 名 住居費（最低限かかる費用）40,000 円/月 【内訳；寮費 12,000 円、食費 28,000 円】 （6）今後の取り組み（令和元年 3 月町長施政方針演説より） 平成 28 年度から「隠岐島前高校魅力化プロジェクト」の名称を「隠岐島前教育魅力化プロジェクト」に改称し、島前高校のみならず島前地域全体での「教育の魅力化」を見据えた取り組みを行っている。 島前高校の 31 年度の推薦入試志願者数は定員の約 1.5 倍となる 37 名と、33 名だった昨年と横ばいの状況で、約 2 倍の倍率だった一昨年に比べると志願者数は減少傾向にある。また、島前三町村からの入学希望者の割合も全体の 5 割程度と予測されており、昨年に引き続き低水準となる見込み。 そもそも島前三町村の中学生の数自体が減少傾向にあることから、今後も島内生の確保は非常に厳しくなっている。これまで以上に危機感をもって取り組んでいかなければならない。 新年度からは 3 月に策定したの「第 3 期島前教育魅力化構想」に基づき、新たな魅力化の動きがスタートします。「地域課題解決型」学習や「国際交流」「海外実践」、ICT（通信情報技術）の活用等、これまでの取り組みをもう一度見つめ直しながら、島前高校の教職員、島前各町村の教育委員会や小中学校、地域住民の方々と連携して事業を進めていく。そして国や地域、世代を超えた交流を図ることで、地域の未来を担うグローバル人材を育成していく。とのこと。
--	---

成 果	中津南高耶馬溪校においても地域課題等をテーマに「高校魅力化プロジェクト」に取り組んでいる。しかし、1 学年 30 名の定員を割り込む結果となっており、耶馬溪校の存続問題は待ったなしの状況にある。まずは、県外からの受け入れ枠を設け、田舎留学制度を早急に始める必要がある。 そのためにも、市立の寮の整備や地域連携型公立塾の整備など、中津市が地域振興のために投資をする必要がある。 また、特進クラスや林業経営学科等の特色あるクラスの編成や水上スキー推薦枠の新設など、特色のある学校にしていく必要がある。 高校が廃校になると、高校生が地域からいなくなるだけでなく、働き盛りの親たちが家族ごと地域からでていく。人口減少に歯止めがきかず、地域の少子高齢化は加速、伝統行事や一次産業は担い手不足で衰退し、地域の活気は失われ、やがて耶馬溪町に住む人がいなくなる。そんな未来が予想される。 そこで、地方創生の 2 期計画の策定に当たり、中津市独自の耶馬溪校の魅力アップ事業の取り組みを計画に位置付ける必要がある。
------------	--